

共催：関西学院大学応用心理科学研究センター  
(文部科学省学術フロンティア推進事業 先端技術による応用心理科学研究)  
主催校企画公開シンポジウム「テクノロジーと行動分析」  
*Technology and Behavior Analysis*

司会：嶋崎 恒雄 (関西学院大学) Tsuneo SHIMAZAKI (Kwansei Gakuin University)  
話題提供：杉山 尚子 (山脇学園短期大学) Naoko SUGIYAMA (Yamawaki Gakuen Junior College)  
山田 恒夫 (メディア教育開発センター) Tsuneo YAMADA (National Institute of Media Education)  
指定討論：望月 要 (帝京大学) Kaname MOCHIZUKI (Teikyo University)  
島宗 理 (法政大学) Satoru SHIMAMUNE (Hosei University)  
八木 昭宏 (関西学院大学) Akihiro YAGI (Kwansei Gakuin University)

われわれの日常生活はテクノロジーの進歩によって日々大きく変化しつつある。そうした「ハイテク」時代における行動分析学のあり方について、行動分析学の内部と外部から問題提起していただく。

「究極のローテクはハイテクである：行動のエンジニアリング」

杉山尚子 (山脇学園短期大学)

B.F.スキナーは、自身が心理学に成した最大の貢献は「強化随伴性」の概念であると自覚していた (Lagmay, 1990)。一方、後に行動分析学として体系化される科学の出発点となったフリーオペラントの実験は、いわゆるスキナー箱の発案なしには存在しえなかったであろう。随伴性という枠組みで行動をとらえる行動観とスキナー箱は表裏一体の関係にある。実験制御がコンピュータを用いてどれほど高度化されようと、スキナー箱を“ハイテク”だとは考えがたい。スキナー自身が開発したティーチングマシンも、テクノロジーの進歩によってコンピュータに取って代わろうとも、それ自体“ハイテク”とは考えがたい。しかし、同時に、xx 工学と称して高価な装置の開発だけに目を向けることもハイテクとはいえない。この話題提供では、随伴性を切り札に、装置を使うという人間の行動に目を向けることの重要性を提起していく。

Lagmay, A.V. (1990). The human reach of B. F.

Skinner's science: A personal memoir. 行動分析学研究, 5, 115-119.

「e-Learning 時代のインストラクショナルデザインー行動分析学への期待」

山田恒夫 (メディア教育開発センター)

e-Learning という言葉はさまざまな意味で用いられる。遠隔学習など、コンピュータなどに向かってひとりでおこなうものもある。しかしここでは、教師や他の学習者とのインタラクションが行われる対面授業やグループ学習での利用も含み、広く「ICT (情報通信技術、Information and Communication Technology) を用いた授業・学習改善」ととらえる。

さて、e-Learning の究極の目標は、個々の学習過程を最適化・カスタム化することにある。こうした理想的な学習は、これまでもごく限られた人々は、家庭教師を雇うなどして実現できたわけだが、ICT の普及によってようやく万民のものとなりつつある。また、高等教育・生涯学習では特に、学習者が多様化し、その興味関心、到達度から学習環境までさまざまである。こうした状況に対応するにも ICT は不可欠である。

話題提供として、学習デザイン、学習コンテンツ設計の分野から、特に SCORM などの国際標準化の動向や、学習オブジェクトなど再利用可能なコンテンツの共有再利用・流通に関する技術動向、その具体的な実用化の動き (GLOBE、OCW) を紹介するとともに、こうした研究開発において基礎分野・隣接分野との連携を必要とする課題を、特に行動分析学との関係において論じたい。